

- ② 背台の調節によって、1人1人の変形や、坐高に合せて入浴できるようになった。
- ③ 段部の固定装置によって、浴槽内での不安が除去され、頭や胸をおさえての介助を必要としなくなり、3人での介助であったものが、2人介助ですむようになった。
- ④ 枕のとりつけにより、頭部、頸部の安定が保たれ、安心して入浴できるようになった。
- ⑤ 胸が少しても、湯にしづむように、リクライニングを45度、30度、15度とおおくしたが、45度、15度は全く使用することなく、30度のみを使用している。できれば、35度、30度、25度ぐらいのリクライニングであれば良かったのではないかと思われた。

＜おわりに＞

当病棟での入浴手順は、湯に入ってあたたまり、洗い台にて、体を洗い、又湯に入ってあがるといった手順をとり、現在、エレベートバスと、普通浴槽を併用し、2時間内で、約36名の患者を、平均10人の介助者で行っている。そのうちエレベートバスは、体重の重い患者、変形が強度で支えの必要な患者を介助者2名で8名、普通浴槽で平均介助者8名で28名を入浴させており、介助者1人当たりにすると4:3.5人とエレベートバスが多く介助している。そして、患者の入浴過程において、今までの浴槽であれば、6回の拘きかかえがエレベートバスでは2回で済み、したがって腰痛予防にもつながるのではないかと思われる。しかし、これ以上の能率を望むには、洗い台で、体を洗ってあがり湯に入るといった手順に変えれば、作業能率をあげることができるが、現在の入浴習慣を変えることは、大変むずかしいと思えた。

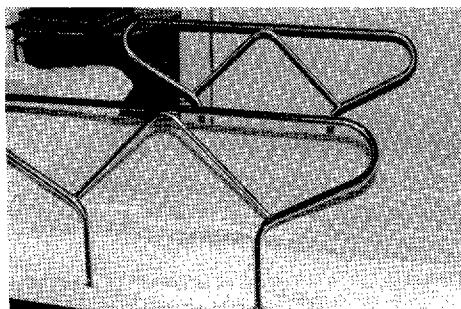
14) ベット柵の安全性の工夫について

国立療養所東埼玉病院

桧	山	豊	子	早	川	洋	子
甘	田	里	美	甲	斐	里	美
高	野	千	秋				

当病棟ではS.49年6月に開棟され現在入院患者数は36名である。その年令構成をみると6才～15才迄で、10才以下が23名と過半数を占めている。PMD児が特に転倒及び転落をしやすいという危険性に備えて現在使用しているスタンダード、小児用、電動ベットには柵が準備され必要に応じて、すぐに使用できる様になっている。しかしこのベット柵はステンレス製のパイプで出来ておりベット上で遊ぶ事の多い年少児、又は障害度に伴いベット生活の長くなる年長児らが、体の支持バランスを崩した時に打撲の危険性がある為、その安全を期する危険防止の方法として1つの試みを工夫してみた。

写真 1.



現在準備されている、ベット両サイドは
め込み式ステンレス製パイプ柵。

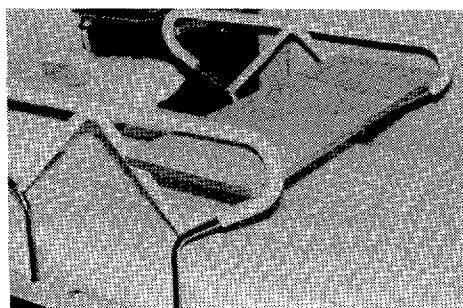


写真 2.

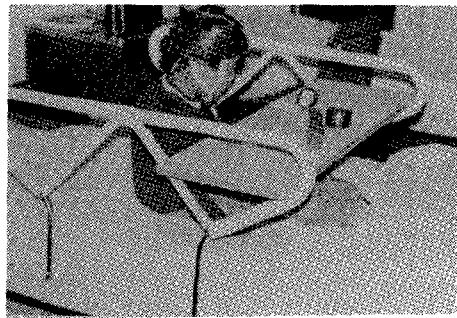
これに厚さ 4 mm のフェルト布を覆い縫いつけてみた。これにより取り付け後は接触時のショックの軽減と打撲、損傷等の危険性は少なくなっている。次に先天性の年少患児 2 名が使用している小児用ベットの場合。



写真 3. の様に鉄製の柵の折りたたみの重なっている部分にフェルトを覆ってみた。先天性で IQ が低く、言語も不明瞭、意思表示も思う様にできない状態の患児では、自分の要求が通らなかったり、思う様にならない場合など柵に顔面や頭部等を打ちつけたりする事も多く打撲や損傷などがしばしばみられたが、フェルトの柔らかい材質により、これらの打撲、損傷等は緩和された。又、冬季においてはパイプ特有の冷感も軽減されている。次に障害度が進行してきている年長患児の場合は、普通の柵付きベットでも転倒や打撲による損傷の危険性が緩和又は防止されているので、現在はスタンダードベッドを使用しているが年長患児は障害度の進行に伴い、一人で過ごす時間、読書、カセットの使用、レコード鑑賞等とベ

ッド上生活を余儀なくされる現状であるが、しかし坐位をとっても支持バランスを崩しやすくなりその為、両側のステンレス製の柵に下肢及び膝関節を打撲する事も多くなる。又、テーブル板を乗せた時にもステンレス製パイプではすべりやすく、その都度カセットや本類など落としていた為、使用しにくい状態であったが柵全体をフェルトで被って写真 4.とした。これにより、坐位バランスを崩した場合にも、テーブル板を乗せた場合にも、ショックの軽減及び、すべらなくなったなど良

い様に思う。



終りに今後の問題として取付け布が汚染された時のクリーニングに耐える材質の選定と、又取付け、取りはずしの簡単な方法等も考えて行きたいと思う。

15) P M D児の衣服(ジーンズ)の改良を試みて

国立療養所東埼玉病院

茂 泉 和 子 加 藤 栄 子
諫 山 和 代 渡 辺 幸 子

<はじめに>

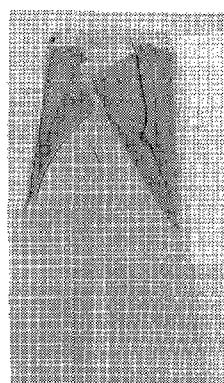
当院 P M D児の衣服は比較的布地が柔らかく、伸縮性に富み、介助しやすいジャージ類を着用させていますが、年令が大きく障害度の高い患児の、ジーンズ着用を希望する声が多く、また、保護者も子供の希望をかなえてやりたい意向にて持参するため、介助者としては拘縮変形のある患児に着脱しやすく、危険の伴なわない方法を考え、試作着用させてみました。

<方 法>

1. ズボンの両脇にファスナーをつける。

特に骨盤の広い女児に使用する。

写真1.



↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字符号認識)ソフト使用 ↓

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

当病棟では .49 年 6 月に開棟され現在入院患者数は 36 名である。その年令構成をみると 6 才～15 才迄で、10 才以下が 23 名と過半数を占めている。PMD 児が特に転倒及び転落をしやすいという危険性に備えて現在使用しているスタンダード、小児用、電動ベットには柵が準備され必要に応じて、すぐに使用できる様になっている。しかしこのベット柵はステンレス製のパイプで出来ておりベット上で遊ぶ事の多い年少児、又は障害度に伴いベット生活の長くなる年長児らが、休の支持バランスを崩した時に打撲の危険性がある為、その安全を期する危険防止の方法として 1 つの試みを工夫してみた。